第Ⅴ章　生活改良普及員から見たサバ州農村の印象と生活改善の可能性

元山口県専門技術員　　藤井チエ子

山口県農林部農村女性・むらおこし推進室
経営普及課農村生活班長　主査　吉武和子

（1）クダット県４村の印象（２月１２日）

「観光開発に沿った地場製品販路拡大プロジェクト」の実施村である４村は、従前からあるゴングづくりやビーズの活用による装飾品づくりに新技術のハチミツづくりの導入による所得向上の推進と地域が有する自然、景観、文化等を活かし、都市との共存関係で地域の活性化を目指すアグロツーリズムの普及定着を図る活動が精力的に展開されているという印象であった。

特に女性がグループにより活動しているハチミツづくりやビーズ活用等のハンディクラフトにおいては、農村女性の技術習得と収入向上につながる活動であり、生産から販売までを自らが行うことにより、将来的に女性の経済活動への参画による女性の地位向上と自立にもつながる活動であると感じた。また、アグロ・ツーリズムにおいても、観光客が滞在中に、村人が得意技術や伝統文化を活かして、伝統的踊りを見せる人、伝統的料理を出す人等、村をあげて役割分担をしながら対応をしていることは、地域の住民の能力発揮の場として有効であり、それが直接個人所得の向上、アグロ・ツーリズムへの参画と理解促進にも通じ効果的であると感じた。

しかし、我々は調査団として村を訪ねたのであるが、一般の観光客は何を目的に、どのような体験をし、滞在しているのかについては、今回の聞き取り調査では明確に理解することはできなかった。四つの村が行っている具体的な活動事例や内容が解れば、助言すべき事項も明確になったと感じている。

ゴングづくりの村の代表者が、この村でなぜゴングづくりを行っているのかを説明するとき、サバ州の伝統的楽器として継承するためと売るため（収入を得るため）の二つの目的があると説明されたが、自らの目的がきちんと整理され説明できることが活動を継続する上で重要な事であると思った。欲をいえば、今後は、将来の夢が語られる様な活動展開へ誘導することが必要になるのではと考える。

ルングス族が居住するというロングハウスでは、教師をしているという家を見せてもらったが、住まい方の基本が変わっていないにもかかわらず、豊かな暮らしが冷蔵庫、テレビ、パソコンで実現され、いろんな情報に無制限にさらされる状況であった。「快適に暮らすために何が必要で何が必要ないのか、どのように家の中を改善したらよいのか」ということも今後、指導内容として考えていく必要があるように感じた。ロングハウスの上り口にゴミが散乱していたが、台所の排水、ゴミ対策についても、今後、指導を要すると感じた。戦後、日本では、農山漁村の民主化を目指して、衣・食・住を中心とした課題から地域生活、村づくり等幅広い生活改善活動の実践を通して推進してきた。当地域における所得向上対策には、現地調査から日本における生活改善指導の考え方が活かされることが必

要であると痛切に感じた。

４村で全体的にいえることは、観光開発と地場製品の販路拡大のためには、実施者が意欲的であるから、関連整備として幹線道から村に通じる道路の改修と、販売先をどこに求めるのかを明確にし、広くＰＲすることが必要である。また、四つの村を機能的にネットワークさせて、４村での体験メニューづくりを行うなどすることにより、市場性が広がり、集客力につながると考えられることからも、関連した協議の場づくりを進めることも今後重要と考える。

（２）パンダン・マンダマイ村の印象（２月１３日）

「遠隔地農村女性への啓蒙・教育活動拡充プロジェクト」の実施村であり、訪問したとき、伝統的踊りが披露され、歓迎されていることが伝わり感激した。また、関係村の各女性グループの代表が自分たちの活動についてイキイキと発表されており、女性たちが積極的に活動に参加し取り組んでいると感じた。

普及活動の中でグループ育成は大きな課題であるが、グループを結成する事が難しいことであり、この地域では既に女性達がグループをつくって、紙すきに取り組まれていることは、「課題解決のためにグループをつくる」という第１段階はクリアできていると感じた。しかし、取り組んでいる活動である「未利用資源での紙づくり」が、女性たちにＫＰＤやＤＯＡの普及員等によって与えられた課題であるため、活動自体が珍しい時期は、活動すること自体が楽しいものであっても、今後、目的が見失われがちとなり、活動を継続させる上では問題が出てくると感じた。

また、当日の集会にも健康を害して参加できない女性も多いと聞き、実際に村の調査でも感じたことは、雨水を貯めたり、地面を掘って湧いてきた水を生活用水としていることや川の水も活用するとのことから、安心・安全でかつ快適な暮らしを目指すための、命にかかわる部分(水・食料等)や集落道等の改修など社会基盤整備が最重要課題であり、その解決への取り組みを、未利用資源活用と合わせて行うことが必要であると考える。

各家を訪問したとき家の内外にトイレが無いので聞いてみると、行政の指導で家の外に１軒に１ヵ所トイレは設置してあるとのことであったが、どこにあるのかはわからなかった。日本においては遠く江戸時代から糞尿の処理については循環型で作物栽培等に活用してきたが、マレイシアでのシステムはわからなかった。

台所の排水も台所から外にバサーと捨てる方式のようで、高床式とはいっても、今後解決すべき問題であると感じた。

自分たちの身近な生活にかかわる問題を、自らの問題として認識し、問題を課題化し解決するための手法を考え、どのように解決したらいいのか自らが考えるという様に、住民意識を醸成していくことが今後必要であると強く感じた。

普及員との話し合いも行ったが、自分たちが行っている活動が何を目標としており、その目標を達成するために、どのように計画的な活動を行っているのかは、今回の聞き取り調査では十分でなく、良く理解できなかった。技術を単に伝えるのでなく、村で人々が、女性が、イキイキと豊かに暮らすため、今何が必要なのか、何が問題なのか、何をすれば

よいのかを村の人と一緒に考えていく活動が重要で、普及員自身の意識改革の必要性を普及員が持って欲しいと思った。

一方、農業関係では栽培指導を行っているということではあったが、何の栽培指導なのかも明確にわからず(聞き取りできなかっただけだが)、農村での生活を豊かにするためにも農業生産としての栽培もしっかり指導して欲しいと思った。

この村の生活改善のために喫緊に必要な知識・技術

- 飲料水を確保し安全に飲用するための知識・技術
- 家族の健康管理のために必要な食料の確保(食料の栽培)と食べ方(調理技術や栄養の知識)等の知識・技術
- 衛生に対する意識の啓発と知識、衛生的な暮らしのための工夫

（3）カリプオン村の印象（2月14日）

「未利用資源および廃材活用プロジェクト」の実施村であり、前日と同様に、女性グループの代表者がイキイキと活動報告を行っており、活動自体は楽しんで行われているのだと感じた。

女性グループが独身者から既婚者まで、若い人からある程度の年齢の方までが一つのグループとして活動されており、話し合いの中で感じたのだが、村の生活改善についての話し合いは一緒でも良いが、課題によっては、年代別の活動もあっても良いのではないかと思った。年代別に欲求が違うという印象である。しかし、未利用資源活用の活動については、いろんなアイディアを取り入れるという観点からは年齢層に幅があるのも良いのかもしれない。

各家の視察をしてみて、パンダン・マンダマイ村に比して室内に家具があり、各部屋に戸があるなど生活レベルが高いと感じた。

しかし、台所はパンダン・マンダマイ村も同様であり、問題があると思った。家族の健康を維持するためには、衛生に対する意識の啓発や知識の付与が必要であり、あの台所で作ったものをタムーで販売すると聞いて、なおさら衛生知識とあの台所で可能な衛生管理技術の普及が是非とも必要であると感じた。

この村の生活改善のために喫緊に必要な知識・技術

- 家族の健康管理のために必要な食料の確保(食料の栽培)と食べ方(調理技術や栄養の知識)等の知識・技術
- 衛生に対する意識の啓発と知識、衛生的な暮らしのための工夫

（4）生活改善の可能性

村の調査を終えて、生活習慣や生活様式が違うマレイシアにおいて、日本的な課題解決手法が有効であると断言することはできないが、生活改善活動は必要であり効果はあるのではないかと感じている。

また、今回は普及員が対象者（現地の女性や住民）を実際に指導している状況現場を調査することはできなかったが、指導している現場を見ることにより、助言・提言内容は変わってくると思う。

以下、今回の調査等で感じた可能性について述べる。

1） 村で働き暮らす人が目標や夢が描けるように支援することが大切

各プロジェクトに積極的に取り組まれているようであったが、新しい技術や考え方を持ち込むときは、技術や考え方を持ち込むことによって、村の暮らしをどうするのか、どうしたいのかを明確にし、対象者（村の住民や女性）自らが目標や夢を自覚でき、達成感が持てることが大切である。

2）普及員が村に行くことが大切

普及員が指導者として対象者がどう変化したら良いのかのビジョンが明確に描けるようになるために、また、村で働き暮らす住民の日常生活を確認し、改善点等をともに見つけだし、必要な技術の指導を行うためにも、実情把握と対象者との人間関係づくりが必要であり、普及員が村に行くことが大切である。できるだけ村に行けるような環境条件にする配慮も大切である。

3）普及員の技術指導レベルを向上させるために研修機会を設けることが必要

今回、いろんな村で紙づくりを教えていたが、普及員の技術が不足しているように見受けられた。新しい技術を指導する場合は、指導者が目指すレベルに対象者が到達するまで、指導を継続する必要がある。そのためには、指導者である普及員が指導する技術を高いレベルで習得していることが必要である。また、その技術に不安があるときは教えてはいけないと思う。

普及員に対する技術習得研修等を行い技術レベルの向上を図ることが必要である。

4）普及員の普及技術の習得が必要

「技術を教える」というのは、単に作り方を教えるのではなく自分で考えて工夫できるようにさせるということである。

グループの人たちが集まって、自ら学び、話し合い、知恵を重ねていくようになるには適切なアドバイスが必要である。

日本の普及員は、やり方を教えるのではなく、考え方を教えるということを重視している。普及員の研修に教育概論や教育原理を取り入れる必要がある。

5） 地域で永年培われてきた技術を掘り起こし活用すること

日本においては、生活環境の厳しい地域において、いかに心豊かに暮らすのか、物質的に豊かに暮らすのかということを目標に、地域のあらゆる資源を活用して、例えば竹や葛でざるや桶などの生活用具や背負子や農林水産物の貯蔵用具等生産用具を、また、山菜加

工、野菜加工、水産物加工等を考案し、それらを郷土の文化として大切に伝えており、それが、現在では都市住民との交流のための手段として活かされている状況がある。これらの技術は村で長い年月をかけて培われてきたものであり、地域興し活動を行うとき、その技術の蓄積が、今、生きているのであるが、マレイシアの村々をめぐって強く感じたことは、新しい技術を安易に持ち込むのでなく、地域に根ざした、暮らしに根ざした技術を確認し、または、掘り起こすことも必要ではないかということである。「なぜ、ゴングづくりか？」と思ったが、歴史的に見て地域に根ざした技術であり、そのことが地域の誇りとなっていた。この技術を活かすことが重要なことであり、要はどのように活かしていくかが問題なのである。

6）　地域で永年培われてきた技術を科学的に解明し、技術確立を行い、それを活用すること

農村女性がローカルケーキを作ってタムーで販売していたが、これは、子どもが本で読んでレシピを教えてくれた新しい技術とのことであった。新しいものは目新しくよく売れるかもしれないが、昔からある、その地域で作られている料理や菓子その他加工品を確認し、その成分や作業工程等を科学的に解明して現代風のものとして技術確立していくことも普及員の仕事であると考える。

様々な地域にある知恵から生まれた技術を大切に、科学的に解明・改善・普及できる技術として確立し、普及していくことから起業化にもつながると考える。

7）　地域(村)の文化を誇れること

村々で、すばらしい伝統芸能やその土地の食事をしたり生活様式を視察し、その地域の文化をすばらしいと感じた。村の人々がその地域の文化に誇りを持って保存して欲しいと思った。

（5）今後専門家派遣を想定して整備すべき条件

村の調査や各プロジェクトチームとの打ち合わせ、政策決定者等との協議を終えて、生活改善の専門家（例えば私たちのような生活改良普及員）の派遣を想定して整備すべき条件について、どうあったらよいかという意見であり、普遍的なものではないということを理解して欲しい。

1）　派遣目的の明示
- 派遣目的の理解促進のための資料整備
- 派遣先での業務の内容が理解できる資料整備

2）　派遣先における各種事業(プロジェクト)の実施内容の明示

3）　派遣先(国・村)の事前情報の提供
- 一般的な生活習慣（衣食住に関するもの）
- 一般的な家族関係
- 宗教的に行ってはいけないこと

4）　農業用語・普及用語等のわかる現地での通訳の配置

5）　派遣期間　１０日前後

6）　その他　必要なこと

・ＤＯＡの幹部女性の日本での研修

・幹部の人たちが現地をよく理解すること